Yokohama　Rosai　Hospital

横浜労災病院　広報誌

労災だより

２０１９−Jan

Ｎｏ．11

新年明けましておめでとうございます

「チーム医療で、患者さん第一に活動し、病院に働くスタッフも満足の得られる医療」を実践して参ります。

横浜労災病院　院長　梅村　敏

新年明けましておめでとうございます。
本年もよろしくお願いいたします。

現在、横浜労災病院の理念「みんなでやさしい明るい医療」の実現に向け、その具体化として「チーム医療で、患者さん第一に活動し、病院に働くスタッフも満足の得られる医療」をスタッフにもアピールしています。

「チーム医療」には、「労災だより」が配布されている皆様の病院、診療所との連携も一緒に考えて頂ければ幸いです。横浜北東部医療の充実に向け、ともに頑張らせて頂ければと思います。

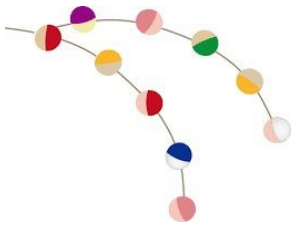
昨年、この「労災だより」にて紹介させて頂いた診療科と先生は以下の通りでした。

・1 月：脳塞栓症への急性期血行再建術（戸村先生）
・3 月：循環器センター（直通電話 070-6454-4131）（柚本先生）、災害拠点病院（中森先生）
・6 月：突発性難聴などへの高気圧酸素治療（安藤先生）
・7 月：小児科の食物アレルギー、内分泌代謝疾患等（菊池先生）、外科診療体制（篠藤先生）
・9 月：運動器外傷センター（小林先生）
・11 月：神経内科（今福先生）

さて、昨年、第５号（1 月号）でも述べました皆様との連携強化も徐々にではありますが進めております。

・病院のホームページを見やすく、分かりやすくバージョンアップしました。今後、登録医の先生方の診療所情報を充実してまいります。
・この労災だよりも規則的に隔月で配布させて頂きました。

・「診療のご案内」（158 ページ）も昨年 5 月に発行、皆様に病院のご理解をいただくため配布させて頂きました。



・逆紹介を推進するために、登録医の先生方へ現在取り組まれている診療機能についてアンケートさせていただきました。その情報を元に、データベース化しご紹介先の参考にさせていただきます。

・ご紹介いただいた患者さんの返書の徹底を計りました。昨年 11 月にご協力いただきました皆様へのアンケートでも返書に対する満足度が 13.5 ポイント上がりました。まだ完璧ではないですが、確実に返書を出していくように、引き続き指導を徹底します。

・救急患者さんのスムースな受け入れを進めるため、当院救急センターマニュアル「原則的に救急室での受け入れの可否を判断し、救急隊に即答し、各科は救急患者の入院受け入れに協力する。」ことを再確認しました。

今後とも皆様との連携を強めさせて頂ければ幸いです。何かありましたら、ご遠慮なく、医療連携室、院長室までご連絡いただければ幸いです。

リウマチ・膠原病センターについて

リウマチ・膠原病の診療に関し、他科との更なる連携をもって高度な医療を提供するとともに、近隣医療機関を支援し、診療の更なる質の向上を目指しています。

リウマチ・膠原病センター長（リウマチ科・膠原病内科部長）　北　靖彦

当院リウマチ科・膠原病内科では、関節リウマチ患者を約 780 名、膠原病および膠原病類縁疾患患者を約 550 名診療しております(2018 年 3 月現在)。2018 年 4 月に新たにリウマチ・膠原病センターを設置いたしました。リウマチ・膠原病の診療に関し、院内においては他科との更なる連携をもって高度な医療を提供すること、院外においてはそれに携わる診療所・病院の医師を支援し、診療の更なる質の向上を目指すことを目標としています。

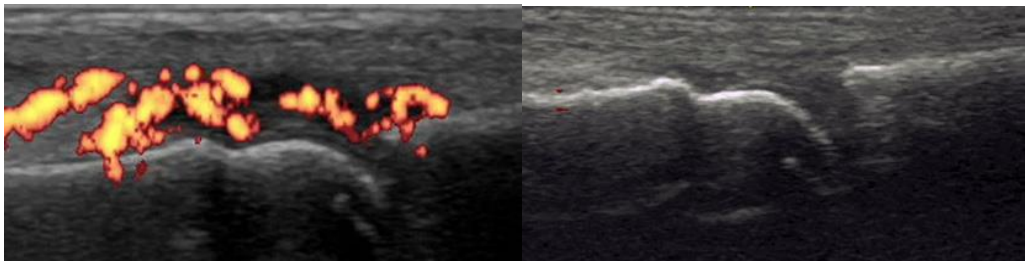
1.　関節リウマチ

関節リウマチについては、早期診断技術が向上し、メトトレキサートを中心とした合成抗リウマチ薬で早期から治療を行い、効果不十分な場合には抗 TNF 製剤などの生物学的製剤を使用することで、「寛解」を目指すことが可能となっています。当院でも積極的に治療を行い、2018 年 3 月時点では約 29%に生物学的製剤を使用しています。関節超音波検査は早くから取り入れ、診断および病勢評価に用いて

います。また、外来では看護師を中心に情報提供や生物学的製剤の自己注射指導を行っています。

横浜市北東部医療圏の人口や関節リウマチの発症率から計算すると、生物学的製剤を必要とする関節リウマチ患者は約 1500 人と考えられます。当院での生物学的製剤使用患者数から考えると未だ適切な治療を受けられてない患者が多数いるものと推測されます。疾患活動性を十分に抑えられない場合には、ぜひ御紹介をお願い致します。

【関節超音波検査でみる生物学的製剤の治療効果】



治療前（滑膜炎あり）　→　治療後（滑膜炎なし）

2.膠原病・膠原病類縁疾患

膠原病は診断が難しい上にさまざまな臓器の障害や合併症が起こるため、専門医が診療を行う必要がありますが、横浜市北東部医療圏には膠原病内科がある医療機関は少ないのが実情です。当院リウマチ科・膠原病内科では副腎皮質ステロイドによる治療に加え、最新の知見に基づいて早期から免疫抑制剤や生物学的製剤を併用する治療を行っています。これにより副腎皮質ステロイド剤の投与量をできる限り減らすことに取り組んでおります。

膠原病診療では多彩な臓器障害や合併症に対応するために他診療科との協力が必要になります。ステロイドや免疫抑制剤などの投与を行うため副作用の説明など薬剤情報提供が重要ですし、他医療機関との相互情報提供が重要となります。

膠原病や類縁疾患の疑いがある場合にはぜひ当院への御紹介をお願い致します。

3.　リウマチ・膠原病センターについて

複数の診療科が協力し、多職種協働で関節リウマチや膠原病の診療を行い、こうした取組を近隣医療機関だけでなく、地域の皆様に広報していくため、リウマチ・膠原病センターを設立いたしました。関節リウマチでは、リウマチ科・膠原病内科と人工関節外科が密接に関わるよう、手術前カンファレンスへの内科医師の参加などを行ってまいります。膠原病では、他診療科と共同で症例検討を行ったり、多職種での情報共有を行っていくつもりです。

当センターの設立により、近隣医療機関やリウマチ科クリニックなどとこれまで以上に連携し、関節リウマチや膠原病患者の受け入れ先としての役割を果たしていこうと考えております。

小児形成外科について

小児形成外科（漏斗胸、手足の先天異常、耳介変形など）に力を入れていきます。

形成外科部長　山本　康

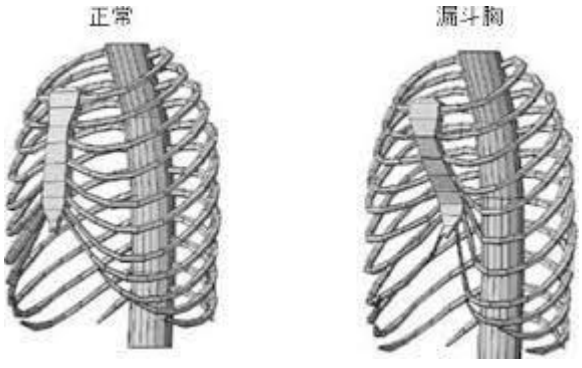
私が横浜労災病院形成外科部長として赴任してすでに６年目となりました。いまだ形成外科を開業する医師が非常に少ない中、診療科という敷居を越えてご紹介くださる周辺開業医・関連病院の先生方に大変感謝申し上げます。

お陰様を持ちまして当初２人でスタートした当科も今や５人の大所帯となり、総合病院としては全国的にも有数なアクティビティを持つ形成外科となりました。また、赴任時の急務であった乳がんや頭頸部がん、外傷後組織欠損の再建手術体制も軌道に乗り、今後も更に皆様の役に立つ形成外科へと発展していきたいと思っております。

そこで、今年設立され第一期となる「小児形成外科分野指導医」の取得を機会に、そろそろ私の本来の専門分野である小児形成外科を始めていこうと考えておりますため、ご案内させていただきます。

実は、私は労災病院赴任前に神奈川県立こども医療センター形成外科部長を５年ほど務めておりました。小児疾患の最後の砦と言っても良いこの施設で、伝統的な得意分野である唇顎口蓋裂をはじめ、２０００例近くの様々な小児形成外科手術を手掛けてまいりました。しかし、当時３人で構成された診療科では外来や手術のキャパシティに限界があり、成長発達において手術至適時期が限定されている疾患を最優先にせざるを得ず、軽症や待機可能なお子様は初診で最低２カ月、手術は半年～１年待ちという状態で、大変ご不便をかけることになっておりました。それは聞くところによると現在も変わらないようです。

小児病院は高度な専門治療を行うためになくてはならない施設ですが、それによって形成外科のような少人数で構成される診療科では、専門医が普及していかないという弊害があります。事実、神奈川県立こども医療センター形成外科の歴代部長は私を含め４人だけで、その内現役医師はすでに私と現部長の２人だけです。それ以外のスタッフの殆どは１～２年の研修医師です。小児形成外科を専門として掲げていく人材が輩出されないことで、患者紹介は病院選定をする余地もなく、とりあえず地域の小児病院へ一極集中し、ご両親が不安を抱えながらお子様の受診や治療を待機するという現状が少なからずあります。



私は、漏斗胸・手足の先天異常・耳介変形にも力を入れて治療に取り組んでおりました。漏斗胸は、手術を行うことで

時には人生が変わるほど大きな満足が得られる疾患ではありますが、現状、神奈川では当院以外はこども医療センターを含め殆ど治療している施設がありません。直接健康を害する恐れが低いということで放置されたり、治療できる施設が近隣に見つけられず、諦めてしまったりするお子様が多く非常に残念に思っております。また、多指症・合指症などは経験豊富な指導者がいないまま若手医師が手術してしまいがちな疾患で、余剰指を切除するだけ、指を分離するだけでなく、もうひと手間かけることでもっと治療の質を高められるケースも多々見られます。そして埋没耳という耳の変形は、生後２～３か月ごろに矯正治療を行うと簡単に治ってしまい、本来就学前に行う手術を回避できることも多いため、初診の早さがとても重要です。

もちろん中には高度な専門治療を要するのか判断しにくいケースもあります。そして、小児病院でも少人数で構成された診療科で全ての疾患を均等に網羅することが困難なこともあります。それに関しては、その分野を得意とする適切な専門施設を選定して紹介することが重要ですが、範囲を首都圏まで拡げればそれが可能です。

それこそが小児形成外科に精通した専門医がご両親に正確な情報を伝える窓口になることができる当院の役割ではないかと考えております。

耳鼻咽喉科とがん

多種多様な耳鼻咽喉科領域がんについて、他診療科とも連携し、患者さんに寄り添った診療を行っています。　耳鼻咽喉科部長　塩野　理

2016 年 10 月から新体制となり、常勤医師が 3 名で診療に当たっていたため、院内・院外の各所にご迷惑をおかけしておりました。昨年度から 4 名、今年度から 5 名へと少しずつ増員していただき、現在はある程度急患や予約外の患者さんにも対応できるようになりました。

増員になったことで、急患対応と並んで取り組まなければならないこととして、重症患者さんへの対応があります。重症な疾患と言えば悪性腫瘍が思い浮かぶことでしょう。耳鼻咽喉科領域のがんは、喉頭癌や咽頭癌、最も数の多い舌癌を含む口腔癌などが有名です。それ以外にも甲状腺癌、耳下腺や顎下腺などの唾液腺癌、さらに頸部リンパ節や鼻腔などに生じる悪性リンパ腫も扱います。病気自体が命に係わることから、その治療も命懸けとなり、患者さんにはとってもつらい病気です。手術や抗がん剤、放射線治療など、副作用や後遺症は非常に問題です。

当院では、耳鼻咽喉科単独で行う手術だけではなく、形成外科や外科、口腔外科と共同で再建する手術も行っております。耳、鼻、のどは首から上の臓器ですので、見た目が非常に大事です。また、標準治療としての化学放射線治療や抗がん剤治療、救済治療としての姑息的放射線治療も可能です。とくに、定位放射線治療による再発腫瘍への治療は最先端の機器を使用し、合併症や後遺症を少なくしています。

大学病院やがん専門施設との連携を密に取っており、治療方針を相談することも行っております。常に最も治る可能性の高い治療方法、負担が少ない治療方法を患者さんと一緒に相談しながら選択しております。これからも患者さんに寄り添った診療を心掛けて対応してまいりますので、今後ともよろしくお願いいたします。

母体搬送受け入れに関して

2019 年 4 月より、26 週以降の母体搬送受け入れが可能な体制が整います。（急告）

周産期センター長 中山 昌樹

2018 年 4 月、新生児科医師 1 名退職に伴い皆様にご迷惑をおかけしていた周産期センターでしたが、横浜市立大学小児科との調整の結果、2019 年 4 月より、同医局からの新生児科医師 2 名の派遣が決まりました。

これに伴い、**2019 年 4 月**より、従前同様 **26 週以降の母体搬送が受け入れ可能**となり、再び充実した周産期医療を提供させていただきます。一刻も早く皆様にお知らせしたく、今号は速報の形を取らせていただきました。

詳細につきましては、次号の“労災だより No.12”（3 月号発行予定）に掲載させていただきます。今後ともどうぞよろしくお願いいたします.

＊＊＊＊＊＊【「第２２回　登録医の会」のご案内】＊＊＊＊＊＊

1　日　時　：　平成 31 年 2 月 19 日（火）　19 時 30 分～21 時 30 分
2　会　場　：　新横浜グレイスホテル　（港北区新横浜 3-6-15）
3　内　容　：　**第１部「登録医の会」**19：30～20：30
（プログラム予定）①下肢静脈瘤とレーザー手術の実際
（臨床工学部長・心臓血管外科　安藤　敬）
②上肢の末梢神経障害　（手・末梢神経外科部長　山本　真一）
③脱毛診療の実際　（皮膚科部長　齊藤　典充）
④超音波内視鏡下胆道ドレナージについて
（消化器内科副部長　関野　雄典）
⑤近隣医療機関紹介に係る取組（地域医療連携室　松本　賢司）
第２部「意見交換会」　20：30～21：30

登録医予約専用電話　☎ 045-474-8362（直通）（受付時間　8：15 ～ 19：00）

～登録医療機関の皆様へ～当院への患者さんのご紹介は上記までご連絡下さい。

横浜労災病院　横浜市港北区小机町 3211　TEL　045-474-8111